もの知りタイムズ編集部　ファクス 092(711)5564　kodopon@nishinippon-np.jp　facebook.com/shiritai

橋を造る

西九州自動車道　佐賀県伊万里市

普段何げなく歩いたり、車で通ったりしている橋は、誰が、どうやって造っているんだろう。私たちは、福岡市から佐賀県武雄市までの九州北西部を結ぶ西九州自動車道で建設が進む住吉橋（同県伊万里市）を取材した。

45メートル橋げた28本

2015年11月下旬、福岡市・天神を車で出発し、西九州自動車道の南波多谷口インターチェンジ（IC）でおりた。この先はまだ開通していない。一般道をしばらく行くと、車の窓から住吉橋が見えた。山と山の間の谷をまたぐように建設が進む橋は、思っていたよりずっと大きかった。「すごーい」。私たちは思わず声を上げた。

建設が進む住吉橋。緑色の大きな機械で橋げたを設置していく

橋を支える柱を何本か建て、柱から柱へと橋げたを渡すという。1本約45メートルのコンクリートの橋げたを4列に並べ、全部で28本も使う。現場の機械はどんなに大きいのだろう、説明を聞きながら想像してわくわくした。

重さ約150トン

事務所から車で10分、山の中腹が橋の入り口だ。機械の音がうるさいと思っていたけれど、私たちは「意外と静かだね」と顔を見合わせた。建設現場には鳥の声が響いていた。

ヘルメットや安全ベルトをして、すでに架かっている橋げたを歩いていく。地上からの高さは約30メートルもあって足がすくんだ。100メートルぐらい進むと別の橋げたを設置する作業をしていた。巨大な橋げたをさらに大きな機械でつり上げ、決められた位置に少しずつ移動させるらしい。橋げたの重さは約150トン。1メートル動かすのに1時間もかかるという。浦川特派員は、完成後は車なら十数秒で通り過ぎてしまうのに、手間を惜しまず、長い年月をかけて造っていることに感動した。

巨大な機械で年月かけて

現場の安全管理に問題がないかチェックする美守隊

建設中の住吉橋の上で担当者に橋造りの説明をしてもらった

おしごと拝見

取材

福岡市・塩原小6年　浦川　颯太特派員

佐賀県みやき町・三根東小6年　北原　葵記者

福岡県久留米市・津福小6年　西田　冴映記者

増える女性職員

力仕事が多く、男性の職場というイメージが強い建設現場だが、全国的に女性が少しずつ増えているそうだ。

住吉橋ではこの日、ピンク色のスカーフとベルトをした女性2人が現場の隅々を見て回っていた。この会社の女性職員18人でつくる「美守隊」のメンバーだ。各地の建設現場を点検して回る珍しい取り組みだという。

たばこをくわえて作業している人はいないか、材料置き場は整理されているかなど、チェックする項目は30近くある。周囲をよく見ると、花の鉢植えが飾られていたり、安全第一を呼びかけるかわいいイラストが描かれていたり。工事長の馬場謙吾さん(51)は「現場がより安全で清潔になった」と言い、西田記者は、女性がいる現場はどこか華やか、と感じた。

見学を終え、北原記者は、橋ができたら絶対通ってみたいと思った。2014年10月に造り始めた住吉橋は、16年中に完成する予定という。

安全は女性技術者が見守る

建設業界の女性技術者は「けんせつ小町」の愛称で呼ばれている。私たちは美守隊のメンバーで、住吉橋の現場で働く下川愛さん(40)に話を聞いた。

―技術者になったきっかけは?

「(1995年1月の)阪神大震災で、丈夫と思っていたコンクリートの橋が倒れている映像を見て、強い橋を造りたいと思ったのが最初でした」

―今はどんな仕事をしていますか?

「図面通りか測量をしたり、写真を撮ったりして現場管理をしています。男性と同じ業務ですが、体力的に難しいことは手助けしてもらいます。作業員への目配りと気配りは心掛けていますね」

―大変なところは?

「忙しいときは朝早くから夜遅くまで働く。屋外なので暑い日もあれば寒い日もある。体調管理には気を使います」

―仕事の魅力は?

「ものづくりは形が残るので、やりがいを感じますね。橋が完成した時に地元の人などから『ありがとう』と言われると本当にうれしいですよ」

―これからの目標は?

「建設の技術はどんどん進化しています。もっともっと勉強して(後輩など)ほかの人たちに伝えていきたい。だから女の子もどんどん(建設業界に)入ってきてほしいですね」

こども記者の取材を受ける下川さん(右)